

- (v) P. L. Møller, "A Visit in Sorg", in *Kierkegaard's Writing: The Corsair Affair*, Princeton University Press, 1982, pp. 96-104。
- (e) Roger Poole, "Søren Kierkegaard and P. L. Møller: Erotic Space Shattered", in *International Kierkegaard Commentary: The Corsair Affair*, Mercer University Press, 1990
- (r) Howard V. Hong and Edna H. Hong (eds), *Søren Kierkegaard's Journals and Papers*, Indiana University Press, 1967-75。訳-JP トヨタ・ソロモン著「ソレン・キルケガードの日記と論文」(「ソレン・キルケガードの日記と論文」)
- (o) Søren Kierkegaards Samlede Værker, Gyldenda, 1964。訳-SV トヨタ・ソロモン著「ソレン・キルケガード全集」(「ソレン・キルケガード全集」)の訳者(吉田尚巳監修「ソレン・キルケガード全集」)中央公論社翻訳収録

キリスト教への修練—躓きの諸範疇

ステイーヴン・シェイクスピア

宮田玲 訳

序

【キリスト教への修練】の初版は一八五〇年九月二十五日に出版された。これは、アンチ・クリマクスの仮名で刊行された二つの著作のうちの第二のもので、第一のものはその前年に出版された【死に至る病】である。両著作の刊行は、キエルケゴールが一八四八年の間、ずっと没頭していた異常に激しい著作活動の結実である。【哲学的断片への結びとしての非学問的後書】の出版と、一八四六年のコルサー事件での彼への公然たる侮辱に対する反応として、彼は著作活動を断念し、神に定められた教職に就くことを繰り返し考えた。しかし、キエルケゴールが当時の現実のキリスト教のディレンマについて深く考えたとき、まだなお伝えねばならない多くのものがあるということが明らかとなつたのである。

コルサー事件は、デンマークの社会生活の非^ノ真正性についての彼の信念を強めた。そこでは、個人的責任と決断という観念は、大衆社会の抽象化作用と浅はかな世論での表現の中に埋もれてしまつていた。しかし、キエルケゴールは、牧歌的で反省を知らない時代へと戻る道がないことをも承知していた。彼にとってのディレンマは、はつきりとキリスト教的である諸範疇を用いつつも、

当の諸範疇を客観的立場や意見の問題というレベルに還元する」となく、いかに公的な場へ介入するか、ということであった。

一 アンチ・クリマクス

アンチ・クリマクスという仮名は、'の問題にとりくむための、一八四六年以前の仮名やキエルケゴール自身の名で刊行された談話とは異なる、もう一つの道を提供してくれた。その名は、「哲學的断片」とその「後書」の仮名著者であるヨハネス・クリマクスと、明らかに関わりがある。「キリスト教への修練」の英訳の序文で、ホング夫妻は、「アンチ」という接頭辞によつてアンチ・クリマクスがヨハネス・クリマクスの拒否であるかのような対抗的意味を生じることを否定する(PC (一) xiii)。むしろ、'の「アンチ」は段階において先に進んでいる、優っている、あるとは、やらない高位、といふことを意味しているのだ、と論じる。ヨハネス・クリマクスはキリスト教信仰の一歩手前の諸謹的人物だったが、アンチ・クリマクスは優れたキリスト教徒だとされる。キエルケゴール自身は自分に相応しいと思つていなかつた、理想のキリスト教徒の化身である。だからこそ、仮名は必要だつた。「キリスト教への修練」は、キエルケゴールが自分自身持てると思えるいかなる視点をも超えていたからだ。キエルケゴールは、「クリマクスは低位だ。自分がキリスト教徒である」とを拒絶する。アンチ・クリマクスはより高位だ。並外れて高い段階のキリスト教徒である」(PC281; JP VI 6439; Pap. X (1) A 530)、と日誌に書いてゐる。

しかしながら、アンチ・クリマクスがヨハネス・クリマクスに対立するという考え方をホングらが

放棄したことは適切であるか、という疑問が生じる。アンチ・クリマクスの名の下で書かれた日誌の一節で、この優れたキリスト教徒は、彼と以前の仮名ヨハネス・クリマクスとの間の引力と斥力について、こう書いている。「わたしたちはお互に関係しているが、双子ではない。わたしたちは対極にいる。わたしたちの間には深く根源的な関係があるが、双方の必死の努力にもかかわらず、反発的な接触以外、その先にも、より近くにも、決して辿り着くことがない。わたしたちが触れ合うようある一点と瞬間とがある。しかし、まさにその瞬間、わたしたちはお互にから無限大の速度で飛び去る。山頂からある一点めがけて落下する二羽の鷲のように。あるいは、崖の上から下降する一羽の鷲と、同じ速度で海底から水面へと獲物を狙う一匹の肉食魚のように。わたしたちは同じ一点を探し求めている。だから接觸する。そしてまさにその瞬間、わたしたちはお互にから飛び退く。各自の極端なところまで」(PC 282; JP VI.6349; Pap. X (6) B 48)。

彼らが触れ合うその一点とは、本物のキリスト教徒であろうと努める点である。それぞれ、違った方向からそこに近付く。だからといって何故、このことが、彼らが再びお互にから飛び退くことにならざるを得ないのか？ 何故、絶望と不安、渴望、そして視点をともにする探求が、無限大の速度で反発することを彼らに示す結果にしかならないのか？

一つの仮名の関係についてのこの疑問は、たまたま目に留まるところ程度のものではない。それは、「キリスト教への修練」の中心問題に触れている。いかにして、欺くことなくキリスト教を伝達するか？ 伝達不可能なことをいかにして伝達するのか？ 鷲と魚のイメージは、キエルケゴールの著作活動において抱かれていたイメージなのか？ 言語というものは、縋い目からほころび、本質では逆説を保持も表現もできない——そこにおいて、時と永遠、理想と現実を関係づける」と

を試みた彼の著作活動のもつイメージなのか？

【キリスト教への修練】はキリスト教信仰の真正面からの提示ではない。一ページめくらないうちから、矛盾に溢れている。たとえば、キエルケゴールは、アンチ・クリマクスが描くような理想的キリスト教徒であると主張はしない。しかし、だとすれば、どうして彼は、このような書を著す真正性を主張しうるのか？もし彼が伝達しているもののうちに生きていなら、どうやつて彼はそれを伝達するのか？しかもアンチ・クリマクスは、抽象的な想像上の可能性しか伝達しない詩人たちを、自らの伝達する諸範疇のうちに生きている真のキリスト教の証人と比して、嘲笑する。しかし、アンチ・クリマクス自身が、詩的人格であり——そして詩人でもある。キエルケゴールは、人々を実存の流れのうちへと連れ出す際、手助けとして必要とされる「宗教的詩人」について書く。しかし、そのような詩は、信仰と証しの純粹性に対する欺きへと陥らざるを得ないのでないのではないか？現代の諸範疇によつて伝達する詩の試みは、キリスト教を危うくするのではないか？

実際、キエルケゴールの日誌は、アンチ・クリマクスが自らを理想と混同するせいで悪魔的（モーニッシユ）だとすらほのめかす（PC 280; JP VI 6433; Pap. X (1) A 517）。悪魔（テーモン）は使徒たり得るのか？悪魔が、自分自身の実存について勘違いしながら、キリスト教信仰の真実を理想的なかたちで提示するなどといふことが可能なのか？

二 『キリスト教への修練』の地位・精神の声 (spirit voice)

『キリスト教への修練』の地位についてのこれらの問題は、『修練』の底に流れる基調と、その明示的なテーマとに関わっている。基調ということで、私は、デンマーク既成秩序に対する戦いの中でこの本を書くキエルケゴールの戦略的意図を意味している。キエルケゴールは著書を故意に両義的にしようとする。そのため、それが既成の体制の弁護なのか、それともそれに対する攻撃なのか、誰も本当には理解することができない。キエルケゴールはこの段階ではまだ、デンマーク教会に、そして特にその監督ミュンスターに、もはや新約聖書のキリスト教を伝道していないと告白するよう仕向けることができる、という希望を抱き続けていた。そのような告白を行なえば、教会は少なくとも、理想のキリスト教を実践しているところまかすことなく、神の恩寵と慈悲に身を委ねることができるだろう。『キリスト教への修練』は、国教キリスト教界への強い批判である一方、この出ていけという文を許すように注意深く図られている。従つて、この著書の全体的効果は本来的に曖昧で、それが実際のところ既成体制の弁護なのかどうかという決定不可能な疑問に、読者は直面させられる。

しかしながら、より重要なことは、『キリスト教への修練』のキリスト教信仰における地位に関する問題が、その明示的な主題に反映していることである。いかにして神人は認識(識別)されるか? いかにして神人の逆説は伝達されるか? キリストは一人の歴史的人間において神を具現したものだとされている。一体、このことが意味ある仕方で、考えられ、提示されるのか? 言語はただ崩壊し、キリストが統一したとされるすべての矛盾した性質は、おのおのの極端なところへとただ飛び退くのか? アンチ・クリマクスは、デンマーク語で「皮膚」と「外観、現れ」にあたる

単語の間の類似性で言葉遊びをしている。彼が次のように言つてゐる。現代の哲学の抽象的概念は「人々に自身の皮膚〔Skin〕から外に出て、まさに散文的に言つなら、純粹な現象〔Skin〕へと思弁によつて到達できる」と思ふ巡らすことのできるよつた外觀〔Skin〕を与えてきた」(PC 81; SV85)。アンチ・クリマクスによるキリスト教の理想的な提示方法は、彼の皮膚が抽象的現象へと解消されたりしないことを、そして、受肉という伝統的教義を支持することを、保証できるのか? 宗教の詩的表現は、没個人的な空想に至る哲学の散文的な横滑りに抵抗し得るのか?

【キリスト教への修練】の内容と意味についてのいろいろした疑問は、その著者の地位から分かつことはできない。キリスト教を理想的形態で述べる、と主張する」とに関して、どのようにアンチ・クリマクスは正当化されるのか? 虚構の人物が、どうやつて、歴史的で受肉した実存的なものの証言をなし得るのか?

私は、アンチ・クリマクスは精神(靈)の声(spirit voice)だ、とみなすのがもつとも相応しいと主張したい。「修練」を仮名で書く必要性について反省している日誌の一節で、キエルケゴールは次のように言い切る。「倫理的な厳格さに、キリスト教の頂点がある。少なくとも、このことには耳が傾けられねばならない。…しかし、実際には、全キリスト教世界の人々が、全聖職者もまた、せいぜい世俗的分別のうちに生きており、それだけではなく、そのことに關して厚かましくも怠慢しその結果として、キリストの生涯は狂信だと解釈せねばならないほどの仕方で生きている、というところが厄介である。だから、他者の声は、雲の中の声として、飼い慣らされた鳥の頭上を飛び越える野鳥のはばたきとして、聞かれねばならない」(PC 283-4; JP X VI 6451; Pap. X (1) A 567)。この雲の中の声が、コペンハーゲンの家庭人を、その手の届かないところにある一つの理念に気付か

せるのだ。

アンチ・クリマクスに関する別の一節で、キエルケゴールは次のように書いている。「仮名があるという事実は、それが詩人の伝達だということの質的な表現なのだ。つまり、語っているのはわたしではなく、別人であり、他の者へと同じようにわたしに対しても話しかける。それは、あたかも精神(靈)が語っているかのようだ。もつとも、わたしは編集者でいる不都合を被るのだけれど」(PC 293; JP VI 6528; Pap. X (2) A 184)。仮名による虚構の、だが同時に精神(靈)的な声は、人々に恩寵の必要性を確信させるような仕方で、キリスト教の理想を述べることができる。キエルケゴール自身は、著作物を自分のものと主張できない。本が提示する理念に関しては、キエルケゴール自身、それを求めて懸命に足搔く人間にすぎないのである。

キエルケゴールは、不完全で足搔き続けている自分自身を、「修練」を書いている理想的な精神(靈)の声と、どうやって関係づけるのか? これは著作全体に亀裂を生ぜしめる問題である。その格好の例が、この本の第三部にある。アンチ・クリマクスは、人生についてまったく没個人的な考察へと還元されてやくような説教を批判する。重大なことは、彼が言うには個人的なものであり、つまり現実の個々人の関係である。語る者はキリスト教の理想へ向けて個人的に努力しておらねばならず、聞き手にも、個人的な努力へと説き伏せ、奮い立たせなくてはならない。これを行なうためには、話し手は自分自身の個人的状況から離れて抽象してはならない。彼は何もかも自分自身との関係、そして聞き手との関係に引き戻さねばならない。こうすることで、述べられているキリスト教的な真実が、ただ単なる興味深い考え方あるいは教義以上のものとなる。それはわれわれを捕まえ、われわれを振り返らせる個人的な真実となる。それは「それが語られているとき、まったく

く独自な意味合いで、そこにある。しかし、対象としてではなく、話し手がその対象となるような仕方で、である。つまり、話し手は、語っているそのときに彼自身を吟味する精神（靈）を呼び起こすのだ」（PC234; SV218）。キリスト教を伝達するという試みにあたって、キエルケゴールも同様に精神（靈）を呼び起こした。仮名アンチ・クリマクスとは、精神（靈）の声である。アンチ・クリマクスとの関係において、キエルケゴールは足搔き続ける人間である。だが、もうもうの逆説が立ち上がるのはここである。キリスト教に関する伝達は個人的でなくてはならない——にもかかわらず、これを成し遂げる唯一の道は、理想的で虚構の仮名を用いることによる。目的はキリスト教的な真実がわれわれを見つめ、吟味することである——にもかかわらず、「修練」のページを通してわれわれを見つめるものは、人間の詩的創作物、アンチ・クリマクスの精神（靈）である。純粹な啓示と純粹な詩的虚構との間のこの境界線にあっては、キエルケゴールが何故、自分の仮名の所産が悪魔（デーモン）の子となり得ることについて思い悩んだか、理解するに難くない。

三 全体の構成

著者性に関するこれらの問題を念頭に置いたまま、この本の構成に手短かに触れ、それから、いくつかの部分の詳細な検討に入ることにしよう。【修練】は三部に分かれ、そのそれぞれに、キエルケゴールが編集者のそぶりで書く序文が付いており、キリスト教徒であることに対して仮名著者がどれほど極端な理想にまで要求を高めるかを述べている。

第一部は「招き」と「停止」から成る。招きとは【マタイによる福音書】のキリストによつてな

されたものである——「わたしのもとに来たれ、すべての劳苦する者、重荷を背負う者、わたしはあなたがたを休ませてあげよう」(Mt.11:28)。アンチ・クリマクスは、この招きの注目すべき性質を強調する。つまり、その包括性である。キリストが積極的に主導権をとつて、迷えるものを探し、彼らの閉鎖的沈黙をうち破るのだ。

しかし、抒情的な流れは突然、中断される。停止が叫ばれる。人々はイエスへと集い、彼の申し出のすべてを歓迎したりはしない。むしろ、彼らは戦慄し、後ずさる。人々は招きによつて——より正確を期すなら、招き手によつて、惹きつけられるより、撥ねつけられる。

こういった言葉が、特定の歴史的個人としてのイエス・キリストによつて語られているため、そのような躊躇が生じる。イエスは皆から譽めたたえられる神的立場から語るのではなく、その卑賤から語つてゐる。彼はまったく明らかに身分の低い人間であるのに、神的な役割を自称する。

アンチ・クリマクスは、キリストが神であると証明する道はあり得ない、という事実を長々と述べたてる。確かに、キリストについての歴史からは何も知ることはできない。なぜなら、キリストは原因と結果という通常の歴史から離れたところ、アンチ・クリマクスが聖なる歴史と呼ぶところのものの内に立つてゐるからである。キリストは世界史における他の対象のようにには知ることができない。彼は神と人間とであるという極端な逆説の具現であるから、信じられるか、あるいは躊躇が、だけである。キリストの神性が立証される何らかの証拠物件を載せる中立かつ中庸の場はない。イエスが生きて以来このかたの全歴史は、信仰とは無関係である。現在、彼が信仰に対して差し出している難問とは、これまでと同様のものだ。それが質的なものだからである。つまり、彼において、神と人の無限に質的な隔たりが特定個人の人間の生涯のうちに乗り越えられたという、

質的なものだからである。キリストを信仰するためには、人はキリストの同時代人にならねばならない。絶対的なものに対する関係においては、現在以外の時間はないのである。

第一部は教訓でもつて終わる。そこで、アンチ・クリマクスは、読者に多少の寛大さを示している。彼らが真のキリスト教の絶対的な理想が何であるかを告白しあえすれば、少なくとも、神の恩寵の中で安らぐことはできる。恩寵が満たされるには、罪の告白がなければならない。しかし仮に、絶対の逆説を相対化し続け、説明づけて解消しようとして続けるなら、そのときキリスト教は廃棄されてしまう。私が先に触れたように、キエルケゴールは明らかに、ミュンスター以下のデンマーク教会がそのような罪の告白をすることを望んでいた。

第二部は、われわれが後に注目する一節を含んでいるのだが、躊躇という観念に焦点を当てている。躊躇の可能性は、十字路であるとされる。信仰が始まり得るために、そこで立ち止まることが必要である。躊躇の三つのかたちが探求される。第一のものは、既存の秩序と衝突する普通の人間としてのキリストが生み出す躊躇である。第二のものには二つあり、キリストが神人であるといふ特定の主張に關係している。うち一つは、単に、誰であろうが自分は神であると人間が主張する、という事実に対する反発である。もう一つは、神だと主張するのが身分の低い、貧しく悩み苦しむ無力な人間である、という事実に対する反発である。ちなみに、ここには緊張がある。あるところでは、キリストはたとえ皇帝だったとしても貧しく剥奪された者であるかのように身を低くするだろう、と語られている(PC 40: SV 49)。しかし、キリストの生涯の外面に現われた状態は重要なように思われる。なぜなら、貧しくかつ力ない者としてのみ、キリストは権力と地位という世俗的な観念に挑戦し得るからである。

われわれが注目した一節は、伝達の問題をより詳細に取り上げており、すぐ後で扱うこととしたい。」の本の第三部は、すべての人々を彼のもとに引き寄せる人の子についての「ヨハネによる福音書」のテスクト(In 12:32)に関する文章から成る。アンチ・クリマクスがキリストの芸術による表現に攻撃を浴びせかけるのは、この部分である。キリストは美的感覺でもって贊美され得ないのと同様に、表現すらされ得ない。キリストは個人的な修練と真理を証言する」とによつて、模倣されねばならない。そしてその真理は客観的教義ではなく、生き方であり、そしてその生き方は卑下と苦難の類であつた。ここでもう一度、後に詳しくみてゆく部分にとつて重要な緊張が生じ得る。もしキリストに関して歴史から何も知り得ず、何も知るべきでないなら、何故、彼の生涯の独特な境遇が重要なのか？もし重大なのが神が人間となつたということであり、ひたすら信じるか否かを問われるのみであるなら、キリスト固有の生涯に関すること以外のすべてが無関係にちがいない。キリストが神人であると信じるか否かというはつきりした問いと、われわれがキリストにまねぶ者であるのかどうかについての多少違つた強調点との間で、「修練」の主眼は揺れ動く。」の一つがいかに関係しあつてゐるのかは、はつきりしない。

四 蹠きの諸範疇

われわれの取り上げたい一節は、いかにしてキリストがそれと認識され、伝達されるのか、といふこれらの問題すべての中心である。形式としては、「蹠きの諸範疇」という題名をつけられ、番号をふられた七つの段落に分かれている。これはおそらく、ヘーゲル的なテクストに対する風刺的

あてゝすりだらう。どちらにせよ、外見は学問的に非のうちどころがないよう取り繕うにしても、まさにその主題の本質からして、テクストのこの部分が体系的なものになどならぬ」とは明らかである。

アンチ・クリマクスは、彼が切り崩そととする三つの事柄の聖ならぬ三位一体を並べたてることから始める。すなわち、純粹存在、匿名性、直接的伝達である(PC 123; SV 121)。彼は、ヘーゲル主義的神学によつてなされてゐるイエスと受肉の教義を再解釈することを田論む。これは、おそらくは特にダビッド＝フリードリヒ・シュトラウスによつて進展した。一八三五年のシュトラウス「イエスの生涯」は、福音書の中に確実な歴史的情報を見付ける可能性については、非常に懷疑的であつた。福音書の物語は、原始教会によつて、神秘的主題に染められ、それがイエスに投影されていふるとみられた。このことから、シュトラウスは受肉という教義に対する一切の歴史的基盤を拒否することになつたのだが、しかしながら、キリスト教信仰を拒否することになるとは考えなかつた。むしろ、キリスト教信仰は再解釈されるべきであり、もつと適切な哲学的表現を与えられるべきとされた。キリスト論(Christology)は史的イエスとの関係から解放されるべきである。一個人イエスのうちに言(Word; logos (In 1:1))が肉となつたとみなすより、受肉とは神が人間性と合つしたことの象徴である。ショトラウスは次のように書く。「人類は、両性的結合であり、人間となつた神、有限性にまで外化した無限の神と、由[ル]の無限性を想起する有限な靈である」⁽²⁾。

このことすべてが、アンチ・クリマクスにとっては呪われるべきことである。それは、彼にとっては、受肉を空想的で思弁的な哲学的学説へと変えてしまい、「此にも見付からない純粹存在の媒介物」の中を漂わせる。キリストという一人の人格は放棄され、匿名となり、イエスは単に一つ

の教説へと、つまり直接に把握できる哲学的真理へと翻訳されてしまう。アンチ・クリマクスは、キリストの個別性と超越性とを堅持するのである。

だが、このことは、このよきなキリストがどのように伝達され得るかを彼が再考せねばならないことを意味する。仮に、キリストが純粹存在でなく、特定の受肉した個人でなくてはならないなら、キリストが匿名でなく、名を持つ個人とされねばならないなら、いかにしてこれを一般的、普遍的な言語で伝達し得るのか？ われわれはどうなる（sign）を使うことができるのか？

アンチ・クリマクスは主張する、「……では教える者が教えよりも重要である」（PC 123; SV 121）と。従つて、教える者の伝達は「重化が特色である」と。「重化とは、教える者が自分の教える」とのうちに実存することを意味する。教えを、教える者の人物から独立に抽出したり、伝えつなくすることはできない。さらに、キリストすなわち神人の場合、教える者自身が逆説である。この二つの条件から、直接的伝達の一切の可能性が廃棄される。「教える者が教えるうちに実存することを通じて、教える者において伝達が二重化されるので、伝達はさまざまな意味で自分自身を再化する手段となる。そして、教えと不可分かつ教えるより本質的な教える者が逆説であるとき、一切の直接的伝達は不可能である」（ibid.）。」のよきな伝達の形式は、逆説がその中心であるため、断片化されており、間接的である。

そのあと、アンチ・クリマクスは、しるし(sign)としての神人の観念を吟味することへ移る。「「しるし」とは何を意味するか？」と彼は問う。「しるしは否定された直接性である。あるいは、第一の存在とは異なる第二のものである」（PC 124; SV 122）。言い替えれば、あるものは、それがそれであるといふの直接的なもの以上であるとき、しるしとしてのみ働き得る。われわれはそれを単に物

言わぬ物体やインクの染みでなく、しるしとして反省し、認識しなくてはならない。そもそもの最初から、そのしるしの核心となる差異の原理がなくてはならない。

アンチ・クリマクスは、それから、矛盾のしるしという観念を導入する。それ自体のうちに矛盾を含むようなしるしである。そのようなしるしは、それを主体的に解釈し、自分のものにする」とを受け手に強いる。冗談と眞面目とが一体となつた伝達は、読者を選択に直面させる。すなわち、われわれがこれをどう受け取るか、である。

神人はしば抜けた意味で矛盾のしるしである。——に一個の人間がいる、そしてまた神でもある。それは合理化できない内的な矛盾である。

だが一体、われわれはいかにして、誰かが「」のような矛盾を体現しているかもしない、と認識するのか。——や（126）、アンチ・クリマクスは「」の矛盾が誰に対しても存在しないようなものとはならないよう…何かそれに注意を引きつけるものがなくてはならない」（PC 126; SV 123）といふことを認める。キリストがキリストであることに注意を引きつける方法として、彼はキリストの奇跡や直接的な発言に目を向ける。奇跡や発言はキリストが神であることを証明できないし、自分は神だというキリスト自身のはつきりした発言すら、直接的伝達ではない。それは彼が表面的にそうあるところのもの、つまり一個の人間であるといふ」と矛盾しているからである。だが、少なくとも、奇跡と発言は、注意を引くことはできる。

この議論には二つの問題がある。第一に、古代世界においては、多くの人々が奇跡を起したといわれ、これがその人々の神性を意味するとはそれない。第二に、新約学者は、イエスが自分は神だと主張したといふとはまったくめてありそんにないと考へてゐる。イエスの神性を主張するため

に用いられてきた「ヨハネによる福音書」の諸節は、後の伝統の産物である。

さて、アンチ・クリマクスは注意深く、奇跡と発言が何かを証明するとは口にしない。しかし、奇跡や発言がなければ、クリマクスはある問題を抱える。もし仮に、イエスが奇跡によりて自分が神だと誰に対しても示し損ねたとしたら、そしてさらに、誰かに彼が神だと示すことに失敗していただなら、そしてさらに自分自身が神だとまったく主張しなかつたとしたら、イエスの神性へと人々の注意を引きつけたものは何だったのか？ 現にイエスが神人であるということは完全に隠されてしまい、伝達不可能にみえるので、もはや無ということになる。

ある意味、アンチ・クリマクスはすでにそのようなことを認めている。ところが、神人に直面する」との効果は鏡をのぞき込むことに似ている——われわれの心の中の考えが露わになる、と主張しているからである。だが、特定の男、イエスと、彼の歴史的な生涯と運命は、どうなっているのか？

次の節は、神人が認識（識別）不可能である、つまり彼は微行（incognito）である、という考えを取り上げる。認識不可能性は「人が本当にそうであるとのものでない」と、たとえば私服をしている警官」（PC 127; SV 125）として規定される。キリストの認識不可能性は、本質的で無限な神と人との差異のうちにある。ただキリストのみが乗り越えられる差異である。アンチ・クリマクスはこれを、善をなすために善をなしていふと外に見えることすら避ける非常に高貴な人になぞらえる。ある高貴な人は、たとえば、自分は自己中心的だという性格を装うかもしれない。その場合には、誰かにこの微行が本当に微行だと理解されるとは、非常に難しくなるだろう。たとえ、微行の仮面が一時的に外され、それから付けられるのだとしても。

神人の場合、微行は神の全能によって保たれる(PC 131-2; SV 128-9)。それはつねにそのようではなければならない、といふことと理解せねばならない。ところは、もしキリストが認識可能な何かへと変わらなく、彼の現にキリストであることが廃棄されるからだ。

この場合の問題点は、アンチ・クリマクスが用いる例によつて暗示される。どんな外観も、どんな外的な振る舞いも、善と両立しないのか? 善はつねにその反対物として現われなければならぬのか——もしそうなら、善が単なる空虚な意図、すなわち決して具現されることのない無となることを、何によつて阻止できるのか? もしキリストが善の受肉したるものならば、彼の生はきっと神の本質について何らかの手がかりを与えるにちがいない。そして後に、アンチ・クリマクスは、キリストをまねぶ必要性を断言する」とによつて、まさにそのことを認めてゐる。こので示されている立場の論理とは、神の受肉はまったく誰にも気付かれないままなら最大限に成功していることになる、というものだろう。なぜなら、受肉を人間が認識するといふことは誤れる認識にすぎないといふことになるからである。神人をしてすものがまったく何もないとしたら、誰もが信仰の対象となり得る。もし私が、ルパート・マードックが神人だと信じるなら、そのことは本当に他のどんな信仰の跳躍とも同じく正当化されるということになるのか? 確かに、あるところでアンチ・クリマクスは、現実の躊躇の機会は、無限の情熱であり、永遠の幸福を十全に理解させるとするほのめかす(PC 111; SV 112)。では、誰がその情熱の対象かということは大事ではないのだろうか? われわれの取り上げた節の次の部分は、直接的伝達の不可能性を強調している。アンチ・クリマクスは一つの間接的な伝達の方法を述べる。第一のものは、「伝達する者自身を誰でもない者にする」と、つまり純粹に客観的なものにする」と、そしてつねに質的に対立するものを統一の中に置

き続ける」といふやう」(PC 133; SV 129)。これは、彼の初期の仮名著者たちがなしたと彼が主張するといふものである。自身を作品から消し去ることによって読者を選択の場に置く。読者はその作品がある立場に対し賛成なのか不賛成なのかを見分けることができず、自身で選択するよう強いられる。

間接的伝達のもう一つの形態は、そのとき伝達する者が伝達される」とのうちに実存するという一重化である。そして、伝達の受け取り手は、伝達する者について何らかの立場をとるよう強いる。伝達する者が「弁証法的に規定されている」ときのみ、つまり彼が矛盾のしるし、逆説の具現であるときのみ、まったく厳密な意味で間接的伝達である。アンチ・クリマクスは、たとえイスガ自分は神だと主張したとしても直接的ではないと主張する。「伝達する者のために、伝達が矛盾を含む。それは間接的伝達となる。それはあなたに彼を信じるか否かという選択を突きつける」(PC 134; SV 131)。

しかし、「」でも問題は残っている。キリストが「」などを主張しなかつたとしたらどうなるのだろうか? そして、別の誰かが自分は神だと主張したとき、われわれはどう反応すればよいのか? われわれがここで信じるよう求められている」とは、正確には一体何なのか?

アンチ・クリマクスは次のように書く。「精神(靈)とは直接性の否定である。もしキリストが眞の神なら、彼は認識不可能性を身にまとい、認識不可能でなくてはならない。そしてそれはあらゆる率直さの否定である。直接的な認識可能性は、まさに、偶像の性格である」(PC 136; SV 132)。またしても精神である。その目覚めにあたって何の痕跡も残さないといわれた(PC 28; SV 38)、「修練」の別の場所にも出てくる精神(靈)である。人はいかにして「」のような精神(靈)に出会うのか?

次の二節で、アンチ・クリマクスは、キリストの苦難の本当の秘密は微行の必要性にあると論じる。キリストは、認識可能になるなら、彼自身を否定し、そして信仰を打ち倒すことになる。愛のゆえに、彼は反発を、距離を保たねばならず、そこには躊躇が見張りに立っている。そして、ただ信仰のみが、神と人との間のその深い溝を飛び越える」とができる。

信仰は信念や理解や意見ではない。それは彼が「弁証法的な資格」、「選択」と呼ぶところのものである(PC 141; SV 136)。それは直接的には生じ得ない。

アンチ・クリマクスの挙げる例は、「こでも啓發的だ。彼は、ある人が恋人のために内面を秘密にする苦痛について書く(PC 137; SV 132-3)。われわれは、この部分の後ろのほうで、自分の恋人が本当に自分を愛しているかどうかを見極めるために彼女を撥ねつけ、自分自身を謎にすることによって彼女を試そうとする恋人のことを読む(PC 141-2; SV 136-7)。高貴な人が利己主義者を演じる場合のように、この例でも、アンチ・クリマクスはそういう振る舞いが正当化されるかどうかについての判断を留保する。探偵でなくとも、レギーネに対するキエルケゴールの振る舞いが影を落としている」とは察しがつく。彼自身の個人的な生涯が、受肉を例証し、正当化するために用いられたのである。いや、それはあべこべではないだろうか? 神の受肉というものが、内面性を最大限に拡大し、それによってかつての自分の行ないを残酷でなく愛の行為であるとして、他の人に認識可能にする、彼の見付ける」とのできた唯一の道なのか?

結び

そういうた疑問は思弁的なものでしかない。しかし、われわれにはこのテクストを貫いている他の疑問が残っている。この作品は精神(靈)——意味の前提条件ではあるが、それ自体はいかなる意味の体系にも参与することのできない、そのような精神(靈)——の声を呼び起^こそうとしている。一切の明示的な意図にもかかわらず、アンチ・クリマクスは、キリストをあらゆる歴史を奪われた非存在へと、信仰あるいは蹠きの單なる一つの機会へと変えてしまっている。実際、キリストの意味を解説するしの理論というより、むしろ逆である。神の受肉があらゆるしの逆説、あらゆる伝達の逆説に関する何かを説明しているのだ。その神の受肉の絶対の独自性が廃棄されている。

だが、キリストをしるしの一般的な理論に持ち込んで空虚なものにしてしまうことに加えて、もう一つの衝動が働いている。これはキリストのまねびの必要性の中で求められる。愛というものが、自己の暗い内面に残されるべきでないならば、具体的な行為に具現されねばならない。単に形式的ではなく、空虚でもない精神についての解釈が、個別的な具体化によって提供され得る可能性は、キリストによって示されている。キエルケゴール自身の振る舞いに対するほのめかしは、内面と外面が単純に分けられない、この厄介な良心というものを反映しているのかもしれない。一切の直接性を否定する精神の声は、誘惑者の声と非常によく似て聞こえ得る。誘惑者ならば否定するが、神の受肉の教義ならばなお要求することは、いかにして愛と自由とを、誰かの知識の対象や直接的な所有物とすることなく、伝達し、具体化するかに関する何らかの説明である。

われわれが取り上げた部分の最後で、アンチ・クリマクスは、イエス以後一八〇〇年間を無意味

だとして脇へと押しやる」と、アレクサンドリアの図書館を焼き払う」とになぞらえる。時間と言語とに対するそぞろつたテロリスト的な態度は、彼がつねに行なつてらる誘惑である。しかし、この雲の中の声は、沈黙の永遠性から抜け出して具体化へと踏み出す伝達を垣間見せてくれる。猫と魚とは、きっと自分が無限の極へと撥ねつけられるだろうと完全に予期して、お互にくち近付く。そのとも、彼ら自身が驚くことになるだらう。

注

(1)以ト用は次の略記号によれ。

PC: *Practice in Christianity*, translated Howard and Edna Hong (Princeton 1991)

SV: *Samlede Værker* (3rd edition, Copenhagen 1962) volume 16.

JP: *Journals and Papers*, translated Howard and Edna Hong (Bloomington 1967-8)

Pap.: *Papier* (Copenhagen 1909-48)

(2) D. F. Strauss, *The Life of Jesus Critically Examined*, London 1898, p. 780 (中村哲夫訳「マヌスの生涯」) 教文館一九九二、K111(販) (原註)

(3) Murdoch, Rupert (1931-) ハーミー・ハーミー・フォード Fox Television, 20th Century Fox, New York Times, London Times 等の紙上に登場する News Corp の編集者である。『年間最大の影響力を持つ人』に大いに影響力をもつ。一九九七年 United Jewish Appeal の「Humanitarian of the Year」や、一九九八年にはカトリック教会によるナッシュビル賞受取者トニー・ホーベルト受取。(訳註)

(4) これは一九九八年一一月、英國キエルケコール協会で読みあがられた原稿である。

新たな国際的研究の光を浴びるキエルケゴール

ヴァルター・R・ディーツ

藤枝 真 訳

キエルケゴール研究は現在欧米の広い地域において熱心に行われており、キエルケゴールを狭い意味で流行の学者として捉えることなく研究が進められている。キエルケゴール研究センターは一九九三・九四年のデンマーク政府の寛大なる資金援助を得て設立され、コペンハーゲン大学神学部組織神学研究所と提携した。一九九六年から定期的に研究年報とモノグラフが刊行されている。以下では、一九九六年及び一九九七年の『キエルケゴール研究年報 *Kierkegaard Studies Yearbook*』について紹介し、また一九九六年のシンポジウムの論集『キエルケゴール再訪 *Kierkegaard Revisited*』と、ニロテア・グレックナーの著作『キエルケゴールの反復の概念 *Kierkegaards Begriff der Wiederholung*』について論じる。初年度は、テーマの重点は人間学、倫理学、そして解釈学の領域に置かれて報告がなされた。一九九六年の研究年報の序言において、二つの基本方針が示されている。一、キエルケゴールに対して学際的な取り組みをすることへの要求。二、史的・批判的キエルケゴール全集という主要プロジェクトに伴う文献学的なキエルケゴール研究。この全集は通常の印刷された版と、電子テクスト版(CD-ROM)として刊行される。研究年報には、毎年八月に行われるシンポジウムにおける講演の出版や、協同研究者の研究計画の構想、史的・批判的全集の具体化に寄せた論文、研究センターからのニュースなどが含まれている。ニュースには、例えば、研究センターに属する研究者の簡単な研究実績のリストなどが含まれている。その点でこの研究年報は、キエルケゴール研